

奈良県明日香村における「ふるさと」演出と古都飛鳥観光の真正性

池田 雄斗

本学地理・環境専攻2009年3月卒業

はじめに

「ふるさと」ということばを聞いてどんな場所を想像するかと問われると、返事の内容は多種多様なはずである。海の近くで生活していた人には魚介類や船舶に囲まれた漁村の風景であり、工業地帯で暮らした人には密集した工場と林立する煙突などの景色が思い出されるであろう。都会出身者は高層ビルやイルミネーションに彩られた華やかさこそがふるさとのイメージなのかもしれない。自らが生まれ育ち、数々の思い出や懐かしさが集合する場所である。

では世間一般的な「ふるさと」はどのような場所を想像するかと問われると、概ね意見は一致するのではないかと推察される。滝波(2005)は「うさぎ追いし、かの山」の童謡で表現されるような場所が日本の原風景であるとしている。山々に囲まれた里山の小集落には澄んだ川が流れていて、一面に美しい田園風景が広がる。そしてそこには時間に追われない農民たちがのんびりと、しかし懸命に汗をかきながら農作業に励む一連の光景が存在する。よく見かけそうな風景が日本人の心の「ふるさと」として認識され、世間全体の記憶に投影されているのである。

現代人は前述した「ふるさと」景観を欲している。都会在住者にとっては日常空間から逸脱するある種の癒し効果が望める場所であること、さらにこの景色が地域開発などで消失傾向にあることも影響して重要度が増している。日本においてグリーン・ツーリズムやエコ・ツーリズムなる発想が顕著に見られるようになったのも農村景観に対

する憧れを観光という余暇活動で獲得しようといった気持ちのあらわれだといえる。「ふるさと」熱の高まりが想像できよう。

その過熱ぶりに乗じて、美しい農村景観を持つ市町村が過疎地域からの自立促進を目指しているのも事実である。北海道の美瑛町のように独特なパッチワーク畑地景観を整備し、農民の生業を披露することで観光客の誘致に成功した地域も出現している(関戸 2007)。

本稿で扱う明日香村は「古都飛鳥」として既に観光客には認知されている。それにも関わらず明日香村は「ふるさと」としての魅力や重要性を考慮し、様々な手法を駆使して観光客へ情報を発信している。既に「ふるさと」を意識した町並み保存運動は、地理学上の重要な研究対象となっている(福田 1996)だけに、明日香村の「ふるさと」まちづくりが観光客のイメージ生成にどのような影響を及ぼしているのか非常に興味深い。

これまでの明日香村を対象とした研究は農地保全政策の評価(藤本 1998)やグリーン・ツーリズム(宇山他 2002)など、どれも農業に比重が置かれたものが多かったため、少々視点を変化させることで有意義な結論に至るだろうと推測した。本研究の目的として奈良県明日香村が実施している「ふるさと」まちづくりに着目し、景観維持活動の実施と完全性・真正性といった普遍的価値との関係性を調べる。またゴッフマンの「表舞台」と「舞台裏」の理論を用いて、飛鳥という観光地としての演出を観光客の心情動向から熟考する。筆者は観光地演出に関して、完全性・真正性を追求していくには限界があり、その過程では複

数の矛盾点が発生していると考えている。それでも演出が成立するのは、ツーリストが「渾然とした認識」で判断をし、矛盾点を感知し得ないからではないかという点を立証する。

従来の研究

1. 観光地理学の研究過程

専ら我が国の観光を地理学的視点から遂行する学術研究は山村（1995）が論じた政治経済や社会文化的な構造と機能に着目した観光地域形成過程の研究が基幹である。観光地は地域別に独自のイメージを布置している場合が多いが、独自のイメージには固有の観光資源により変化する魅力や文化・伝統といった、人間が定住生活を送ることで創出された地域差の影響を受けて顕著となる。従って該当地域の歴史の変遷を追跡することで観光地としての繁栄や衰退に関連する事象を把握できてしまう。

観光を多方面の観点から展望することも可能である。滝波（1998）はツーリスト自身の語りに注目しながらツーリスト経験を検討するという新たな視点を提唱した。個人が何を体験し、どう意味づけるかという問題がツーリスト経験の研究である。ここで注目すべきは、研究の主軸に非合理的とも捉えられるツーリストの深奥に存在する心情動向を用いている点である。

滝波（1998）は人との出会い、景色などの旅先での非日常空間との遭遇、旅行中の問題との遭遇などを背景にしてツーリストは自らのツーリスト経験を実感するとしている。この研究はツーリストまたはそれらが記入した旅行文から成り立つもので、人間を主体に認識論を追求したものである。同様の観点で場所イメージの研究（内田 1993）や観光地の印象（遠藤 1996）、場所が織り成す雰囲気の違いの研究（滝波 2003）にも言及されるようになった。曖昧かつ不透明でありながらも観光地にはイメージや雰囲気が確実に存在し、影響

を与えているのは事実である。

1950年以降の計量革命（quantitative revolution）が普及して以来、計量地理学のように統計データを収集し法則を窮理することを名目とする研究が場所イメージという抽象的な概念を扱う分野にも流行した（伊藤 1994）。依然としてその態勢が継続しているが、一方でツーリスト個々の感受の差異を考慮する価値も十分にあり、その具体性に富んだ研究は今後も有効であると評せる。自己の「心的世界」が表現しているある言葉（記号あるいは信号）が、他者においても同じ「心的世界」を表現しているとは限らないからである（遠藤 1996）。観光地に赴いたツーリストは一体何を追求し、何に満足するのかという疑問を統計的に解明することは具体性に乏しく、必ずしも得策とは言いがたい。

2. 真正性と完全性

ツーリストの深層心理を紐解く場合には真正性（オーセンティシティ authenticity）概念を用いる研究が増加している（ブーアスティン 1964）。真正性とはツーリストの心理的衝動を駆り立てる、本物を追求する思考行為や物体が本物であることそのものを指す。ツーリズムにおける真正性研究には社会学・人類学・民俗学といった分野も並行して関連し、経済的な利益を伴う観光政策などにも影響している（荒山 1995）。

それは観光地がツーリストにとっては非日常世界であるが、そこには確実に地元住民が日常生活を営んでおり、地元住民にとってその場所は観光地ではなく単なる生活という行為の場であるということである。社会機能が正常に作動することも含めて観光地は本物の姿を維持する。仮に現地で生活する人が皆無になってしまったら、観光名所やその他の建造物、インフラストラクチャーが滞りなく整備されていたとしても、そこは観光地であっても真正な生きた観光地ではない。

更に完全性（インテグリティ integrity）という

概念もツーリストの心情動向に不可欠である。完全性とは普遍的価値を維持し続け、過去から現在に到達するまで開発や放棄の影響を受けず生き続けている景観や町並み等を指す。また美的見解としても用いられる。伊藤（2007）は18世紀美学の中心思考である完全性とカントの価値判断について述べる過程で「判明な認識」と「渾然とした認識」を提示した。

美的経験や芸術探究は個々の感受性により好みが変わるといえる点でツーリズムと同質で、特に景観美とは密接に関係しているといえる。景観観賞は人間が目に見える範囲内で美を認識し、最も美しく眺望できる場所を求めて移動を繰り返す。風景写真は空間的な捉え方として希薄ではあるが、人間は無意識的に黄金比を意識して撮影する。ここで重要視されるのは全体のバランスである。山岳景観を例にすると、連立する山々、対比するスカイライン、生い茂る森林、蛇行して流れる河川等が構成する全体像としての完全性溢れる景観にツーリストは「渾然とした認識」で惹き付けられる。山や川といった諸部分は全体を構成するためのパーツでしかなく、厳密に考察されることはない。

3. E. Goffman の「表舞台」と「舞台裏」演出と劇場理論

完全性・真正性の概念をより効果的にするためにゴッフマンの理論を連結させる。ゴッフマン（1974）は複数の社会状況化において、自己の信念や行為を他者に呈示することを理論的に解析し、自己の態度や役割を様々な場面の变化に応じて適当な姿に装わなければならないと述べた。

観光地にこの理論を応用すると、ツーリストの観光地に対するイメージを損なわないためにホスト（受け入れ）側が演出を行うことに相当する。現在行われている観光は現物確認型の観光といえる。ツーリストはテレビ・観光ガイドブック・インターネット等を媒介に大方の情報を取得してい

る。その事前取得した情報と実物が一致していることを肉眼で確認する行為が観光の主な目的であり、ツーリストの満足感は概ねこの段階で決定するといえる。

しかし、全観光地が上記の条件を自然と満たすわけではない。ホスト側の生活や文化を尊重していくと、イメージに歪みが生じ観光地としての価値が下落してしまう。ツーリストの好奇心を駆り立ててやまない観光地にするには本来の姿を脱却し、本物以上に本物らしく存在することが望まれる。観光地演出とはホスト側によって入念に用意されたまやかしの姿である。

マッカネル（2001）は観光地の演出機能上、「表舞台」と「舞台裏」の二区分を示し、精巧な表舞台に対して舞台裏はツーリストにとって神秘的な空間であるとした。そして舞台裏へと通じる扉はいくつも存在し、手に届きそうな位置関係にある。そこには目にする以上の神秘化した何かがあるとの信念を生むと述べている。須山（2003）は観光地景観の構成を劇場に見立て、同一の場所においてテーマの異なる二つの舞台が形成されているとしている。

明日香村の「ふるさと」イメージ生成

1. 明日香村の「ふるさと」意識と観光事情

明日香村が独自に策定した第3次明日香村総合計画（2000年～2009年）では村の将来像を「生まれてよかった 住んでよかった 来てみてよかった ふるさと明日香」として発信している。この言葉から「ふるさと」の重要性についてツーリストだけではなく地元住民もが受信対象だと理解できる。都会の人々がその騒然さに嫌悪感を抱く場合があるように、明日香村で暮らす人々も田舎での生活の不満が転出願望につながる。第 4 章でも述べたように観光地は地元住民の生活行為があって継承されるゆえ、過度な人口流出や担い手不足は観光地としての機能を停止させる。普遍的価値

を持つ村の伝承を絶やさぬために行政が努めるのは、地元住民に明日香村への誇りや自慢といった情愛を築いてもらうことにほかならない。外部と内部の両面から意識される「ふるさと」認識こそ強固なイメージ創出に直結する。

2. 観光ガイドブックが創造する飛鳥のイメージ

既知のとおり現在のツーリストの観光タイプは事前に報道媒体から観光地の情報を取得し、その上で現地を訪問するという現物確認型が軸である。テレビや観光ガイドブックをとおして名所・お食事処・お土産・その他お勧めスポットを網羅して散策することで、無駄を省いた行動を企画できる。長期休暇の取得できない日本文化においてこそ、既定ルートに乗じて要所だけを巡回するという観光行動パターンがこれほどまで根付いたといえる。よってテレビや観光ガイドブックで掲載された情報は日本人ツーリストにとって往々にして絶対化した情報であり、確固たるイメージとして視覚的に記憶される。悪天候によって理想の景観を見られずに落胆するのも、ツーリストがテレビ映像や観光ガイドブックの写真をとおして年に数回しか拝めないような絶景の瞬間を事前に認知し、実に極端な環境下で比較するから余計に落胆するのである。

そこで今回はツーリスト向けに書店にて販売され一般購読可能な観光ガイドブックを選別なく複数参照して飛鳥という観光地がいかにか「ふるさと」イメージを付加して成立しているかを考える。飛鳥の観光情報を掲載しているページで最も目立つキャッチフレーズを抜粋し、その特徴を考察する。第三者機関が発行している分だけ客観的な飛鳥のイメージが反映できる。

表1は各観光ガイドブックの名称と掲載されたキャッチフレーズ、そして同時に推薦されている移動手段をまとめたものである。まず目を引くのが「古代ロマン」、「遺跡」、「石造物」、「謎めいた」といった語句である。これは飛鳥という地の歴史

表1 08年度版観光ガイドブック別にみる飛鳥のキャッチフレーズとお勧め移動手段

観光雑誌はすべて、奈良・大和路エリア版を参考にしている
 キャッチフレーズは一部修正しての掲載
 移動手段 …サイクリングと周遊バスともに掲載
 …サイクリングのみ掲載 ×…両方掲載なし

観光雑誌	キャッチフレーズ	移動手段
歩く地図	謎の巨石ばかりか、名もない路傍の石にも不思議を感じる、そんな心で飛鳥を歩きたい	○
大人の街歩き	数えきれぬ遺跡と古代ロマンがちりばめられた田園地帯は日本人を心のふるさとへ誘う	×
ことりっふ	里山の風景がやさしく迎える飛鳥はにっぽんの田舎	◎
タビリエ	田畑の中に重要な遺跡や謎めいた石造物が点在、日本の田舎の景観が飛鳥は心が和む	○
たびんぐ	飛鳥は不思議ごとくいっぱい歩いて歩きたい	○
てくてく歩き	のんびりした田園風景に古代遺跡、飛鳥時代の100年間、歴史の中心だった地	◎
ふら贅沢な旅	日本の原風景の中に古代ロマンが宿る	◎
まっふるたびまる	飛鳥で見つける日本の原風景	◎
まっふるぼけつと	のどかな田園地帯に神話と歴史が今も交錯する飛鳥の地	○
ふるぶ情報版	ポランティアガイドと飛鳥サイクリング	○
ふるぶ楽	なだらかな丘陵地の間に田畑が広がる飛鳥、謎めいた石造物や遺跡が激動の古代史を伝える	○

の重みを誇張し、かつて京都よりも以前に都が置かれたこの場所で遠い過去に思いを馳せるといって大きな憧れへと還元される。村内の至る所に遺跡や石造物が点在していることから現在の空間とは隔たった、過去空間へ赴いた印象を感じさせる。これこそが飛鳥観光の最大の魅力だといえる。

続いて「ふるさと」という語句について言及すると、語句自体は11冊中1冊の観光ガイドブックにししか表現されていない。しかし表1を見ると「田舎」、「里山」、「田畑」、「田園風景」、「日本の原風景」といった語句が多用されている。筆者は上記の語句が「ふるさと」と密接に関連していると考え。田舎には都会から離れた在郷という非常に広域的な意味のほかに、本人の生まれ育った場所という意味も含まれる。原風景には変化以前の懐かしい風景という意味がある。多くの日本人にとって親しみある景観を回帰させる懐かしい日本の原風景こそ都市化で消失しているふるさとであり、里山に囲まれ田畑や田園地帯が広がった在りし日の農村景観である。すべての語句が直接的ないし間接的にふるさとを表現している。列挙した語句が全て同じ意味合いだと考えると、観光ガイドブックのキャッチフレーズとしては約7割が採用する重要な単語だと理解できる。飛鳥観光には社寺仏閣や遺跡等を巡って歴史の断片を臨む以外に、田園風景に囲まれながら悠々と時間の経過を味わってもらう「ふるさと」体感要素も存在するのである。

「お薦め移動手段」としてレンタサイクルが9割以上の確率で掲載されているのも、観光地自体が小規模で比較的容易に巡回できる以外に、目的地間の移動の合間にサイクリングをしながら、眼前に広がる田園景観を楽しむことで付加価値を得て欲しいという意図がある。周遊バスは徒歩での観光を補助するものであり、飛鳥観光では自動車利用を薦める情報は滅多に発信されない。

観光ガイドブックの飛鳥の情報掲載欄で共通するのは過去へ誘う語句が羅列していることである。文字情報から過去に関係する多くのイメージを与えられることで、ツーリストの飛鳥に対するイメージは過去空間への旅路として印象づけられる。

景観保全で維持されるかつての都、 飛鳥の舞台創造

1. 「古都法」・「明日香法」に守られた村

明日香村は大都市近郊に位置する適当な通勤圏であり、それゆえ多くの歴史的遺産と農村景観に戦後復興から延長した開発の波が押し寄せた。同時期に農業の衰退も相俟ったことで景観保全問題は加速し、地元住民は問題と直面することになった。

そこで1966（昭和41）年に公布、施行されたのが「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」（以下古都法）である。この法は歴史的ないし文化的遺産を個別に保存するのではなく、自然環境も含んだ周辺一帯を指定地域としている。そして景観等の可視的要素と雰囲気や風土等といった不可視的要素を一体として捉え、全体像として一切の欠損なく保全することを主眼に置いている。

京都市、鎌倉市など10市町村にこの法律が適用され、奈良県においては明日香村を筆頭に、斑鳩町、橿原市、桜井市、天理市、奈良市と古都法適用都市のうちの過半数以上が選出されている。しかし他の市町村にて古都法の対象地域が一部分に限定されているのに対し、明日香村は村内全域が

古都法の対象となっている。明日香村内には部分的に傑出した名所があるのではなく魅力が分散しているため、全体を包括して「日本のふるさと」を連想させる要素と判断し保全するに至ったとしている。一部でもふるさと景観に欠陥が生じないよう、古都法により村内全域が第一種歴史的風土保存地区や第二種歴史的風土保存地区に区分して指定され、更に奈良県風致地区条例に基づく風致地区にも明日香村全域を指定して、建築行為の許可申請を設定している。そして幾重にも重複した上記の厳格な管理体制は、「明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法」（以下明日香法）第2条第1項に示され運営されている。

明日香法とは1980年（昭和55年）に景観保全を規制する運営管理と、住民生活の安定と向上を目標に掲げて施行された。観光地が観光地の魅力を保持するには行政だけでは決して達成できない。住民にも様々な意志があり、その意志を行政が操作することは困難である。操作という攻撃的な姿勢でなく、行政には住民に対して柔らかな対応と慎重な行動が望まれる。飛鳥の魅力は既に述べたようにふるさとを回帰させる景観であるが、そこには家屋一棟でも景観を乱すことは許されない。塗装や形状等どんなに微細な事項であっても統一が最低条件となる。明日香村に住む人々は建築行為許可に制限があるため、バルコニーを追加設置したりソーラーシステムを導入することもできない。ふるさとらしい景観を強調するため、地元住民にはあえて時代の流れから逆走することが求められている。図1の建築行為の許可件数が年々減少していることも厳格な対応がなされている証拠である。過度な負担が不満に変化しない様に資金面で支援し、許可申請の際にも即却下するのではなく話し合いの場を設けている。住民側も飛鳥を裏切る行動を軽率に行うことは皆無であり、そこには行政と地元住民が足並みを合わせる姿勢が見受けられる。

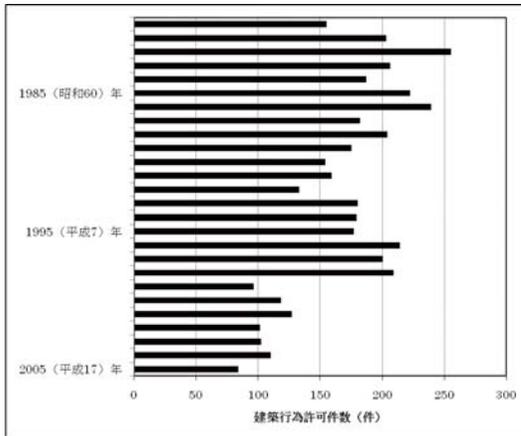


図1 明日香村における風致地区内の建築行為許可件数
出典:明日香村役場地域づくり課資料をもとに筆者作成

保存や保全を実施するなかでどうしても保守的な態度を取る場面が出てくるが、現状維持のみの営みは村全体の活力を奪ってしまう。明日香法を共通認識として、飛鳥景観の魅力を最大限に活かした観光地発展を目指すという大義名分により行政と地元住民が相互に協力し合う。このコンセンサスが観光地としてのふるさと飛鳥の舞台を限りなく完全に近い景観に創りあげている。

2. 飛鳥らしさを創出する景観維持活動と完全性

明日香村の風土や雰囲気を守るために行政と地元住民が連携を取り、多くの景観維持活動が実施されている。そしてその活動によって飛鳥を本来の姿以上に飛鳥らしく観光客に提供しているといえる。しかし表面的な景観は完全性を保持していても、その効果を裏側、いわゆる観光機能を有していない区域にまで持続させることは難しい。観光客が誤って周遊路から外れることで偶発的に飛鳥の裏側と出会った場合、完全性について心情の変化が見受けられるのか。実際に行われている景観維持活動の事例と、筆者が明日香村内にて観光客と対面式聞き取り調査を実施した際の内容を並行して説明する。

1) 建築物・工作物

建物や工作物の形態は、許可申請があるために役場が参考事例を提示している。歴史的風土とも調和が取れるように、参考デザインは懐かしさを感じさせるものである。一軒一軒が明日香村の雰囲気を傷つけないよう努めているのである。また一般家屋に限らず消防施設や病院などで上記の条件は通用し、それらの景観は町屋や寺内町に似た構成といえ、実際そのような家屋が連結して美しい景観を創作している(写真1)。明日香村を町屋や寺内町と定義するのは間違いであるが、その点の詳細な見解については後述する。

Aさん(滋賀県、20代、女性)は、写真1のように周遊路内で家屋が連立する光景を、江戸時代を訪れたような歴史的な景色が広がっていて日本史の教科書に載っているようだと感じている。一方で内側は見たことがないので外観のみで判断したイメージだが、あえて家の中を見ても地元の人が普通に生活をしているだけだし見たいとも思わないと述べた。Aさんのような観光客には家の中まで完全性を確認する機会はない。表舞台として完成された景観のみが認識できる範囲であり、Aさんのイメージ構成条件となる。



写真1 明日香村の町並みの様子(筆者撮影)

2) 電柱・電線

電柱・電線については近代的な試みが実行されている。明日香村の中央部に近い観光名所の川原寺跡付近では、より景観保全に突出した配慮を施



写真2 川原寺跡の電柱・電線地中化の様子
(道路と平行方向に筆者撮影)



写真3 川原寺跡の電柱・電線地中化の様子
(道路と垂直方向に筆者撮影)

すため道路沿い数百メートルの電柱と電線を地中化した(写真2)。これにより余計な物体を地上から撤収させ見栄えを良くした。写真3でも確認できるように、川原寺跡周辺は比較的視界の開いた場所だが、電線を除去することでスカイラインや全体像としての景観をいっそう美しくしている。この事業は明日香村では取り組み始めて間もなく、財政的にも相当な費用を費やすので全域に浸透してはいない。しかしふるさと景観を維持するため現代を象徴する物体を排する行為は、過去の景観を精巧に復活させるという点で、完全性を追及しているといえる。

けれども全体像として景観を捉えると、電柱と電線の地中化はあまりに微細な変化であるために気付かれぬことも多い。Aさんは、電柱や電線

がないことに気付かなかつたし、Aさんの地元にも電柱や電線が多くあるわけではないので大差がないらしく、飛鳥に来てから一度も電柱や電線のことを注目していないという。また川原寺跡の景観についても細かい視点ではなく、周辺を全体像としてぼんやりと見た程度で美しさを感じたという。Bさん(奈良県、40代、男性)は、大和高田市在住のため明日香村の地中化事業自体は知っているが些細な変化のため興味が無い。明日香村全域が地中化されていたらすごいと思うけれど、一部分だけでは写真2のように少し遠くを見たら電柱も電線もあるからすごさがよく分からないと述べた。電柱・電線地中化事業は行政の意に反して、観光客にはその変化があまり認識されていないといえる。

3) 道路・河川・駐車場

道路、河川、駐車場も整備が実施されている。道路については車道ではなく自転車や徒歩で使用する観光周遊路(図2)の方がいっそう緻密な整備状況にあり、自然色舗装で見た目も道路という存在の都会らしさを、コンテンポラリーな様子を緩和させている。また観光周遊路は自動車が走行する場所とは隔離している。多くの観光スポットは図2の観光周遊路の範囲内で快適に巡ることができる。

一方で道路整備の状況は観光周遊路のみに限定されているといっても過言ではない。一步でも観光周遊路から裏側へ進入すると状況は一変し、整備が粗雑な箇所も見受けられる。ただ観光客の視点は裏側まで細部には及ばない。多数の観光客が曖昧で「渾然とした認識」で観光しているため裏側を詳細に見ようという意思が乏しい。よって現実には完全ではないものの、観光客には粗末な舞台裏が見えず完全性が成立してしまう。

河川整備についても定期的な整備が行われているわけではなく、飛鳥川の未整備な箇所は河川に雑草が生い茂っている。ボランティア団体が景観



図2 明日香村中心部の観光ガイドマップ（観光周遊路）

（出典：国営飛鳥歴史公園資料より一部修正し筆者作成）

への配慮で雑草を除去する活動を行っているが充分ではない。しかし道路整備と同様で観光客の視点が細部に及ばないため、雑草はむしろ自然が残存していると誤認してしまう。

Bさんは、道路整備が観光周遊路を中心に整備することは当然だが、住んでいる場所が近いだけにふらっと散歩をしに来たりもするので、歩きやすいのは安心するという。河川の雑草については田園風景を見慣れた農村で暮らす人々なら一目瞭然だが、都会出身の観光客は気付かないだろうと述べている。Cさん（東京都、50代、女性）は見知らぬ土地の場合に観光周遊路から逸れないよう注意している。観光は好きで頻りに旅行をするが、もともと土地勘がない場所では迷ってしまうことも多いので地図は常に携帯しているらしく、仮に枝道に進入した時は軌道修正を優先し裏側で見たものへの関心は低いいためすぐに忘れてしまうと述べている。ここでも観光客の曖昧な観察

により未整備の部分がぼやけて完全性が成り立つこととなる。

駐車場については条例で増設が制限されレンタサイクルや徒歩へ誘導される。しかし景観に危害を与える事実が存在したとしても、需要がある以上は既存駐車場をなくすことはできない。明日香村が取り組むのは駐車場の存在を如何にして観光客の視界から隠蔽するかである。石舞台古墳には約200台の自動車を収容できる巨大な駐車場がある（写真4）。大型バスも駐車できる明日香村内で最大級の駐車場である。しかし写真5のように石舞台古墳の前に立ち明日香村内を望んでも、展望台から巨大な駐車場は一切確認できない。本来なら古墳のすぐ下部に存在する駐車場を、木を植えることにより観光客の視界から排除している。ここに植わる木々は財団法人明日香村観光開発公社から寄贈植樹されたもので、景観保全のために意図的に植えたことが理解できる。ツーリ



写真4 明日香村最大級の石舞台駐車場の様子
(筆者撮影)



写真5 石舞台古墳から明日香村内を展望する様子
(筆者撮影)

ストの目に見える範囲の不備を補い、美しい景観を演出しているといえる。

4) 自動販売機・ゴミ箱

自動販売機やゴミ箱は観光での行為の一角として密接に関連している。利益や需要を考慮すると消費・廃棄行為の多いところに設置されるので、必然的に観光客の通行が多い地点に設置される。一方で設置する行為自体が景観を阻害しかねない。

明日香村内の自動販売機は乱雑に設置されており改善策は施されていないが、外観が派手なだけあり目立ってしまう。対策として飛鳥寺付近の自動販売機数台は企業ロゴではなく「飛鳥」の文字イラストが印字されており、カラーも白色で統一されていて景観への悪影響を軽減しているが、浸

透程度はごく僅かである。

ゴミ箱は周遊路等の道端に無造作に設置されていない。明日香村の方針として意図的に制限し、ツーリストには自ら発生させたゴミを持ち帰るよう促している。またゴミの持ち帰りを徹底させるために飛鳥京観光協会をはじめ複数団体が観光客へゴミ袋を配布している。デザイン性に富んだゴミ袋を配布することで不快感のない持ち帰りを促進し、ゴミ袋以外の用途として使い切りでなく半永続的に愛用してもらえるようになっている。具体的な処理方法を提示することでツーリストも困惑なくゴミの持ち帰りに協力できるのである。

Cさんはゴミ袋を持つとツーリストとしての責任能力が芽生えるし、デザインの的にも悪くはないので小物入れや手提げ用として再利用できるとしている。でもCさん自身は配布用ゴミ袋をもらっていないし、村の管理が難しい国管轄の高松塚古墳や石舞台古墳周辺にはゴミ箱が普通に設置されていたので、そこに捨ててしまったという。

ツーリストにゴミを持ち帰ってもらうことは明日香村にとっても都合が良い。ゴミ処理には多額の費用を要するし、観光地の場合は訪問者が多い分だけ排出量も増加しホスト側に負担がかかるのである。表向きには景観保全を謳うと同時に財政的出費も削減できるという、非常に効率的な取り組みである。

明日香村全体の風土や雰囲気損なわないように上記に掲げた様々な景観維持活動が行われている一方で、どの活動にもツーリストが到底辿り着くことのない未完成な舞台裏の部分が存在する。ただし裏側の部分はツーリストと隔絶されているわけではなく、実際はツーリストが訪問可能な位置にある。それでも未完成な状況に落胆しないのは、ツーリストが「渾然とした認識」をしているからであり、裏側の部分は観光地として認識されていない。マッカネル(2001)は「人目を避けた行動は舞台裏で行われる。ツーリストはたとえ実際には秘密などなくとも舞台裏には何かがあると

いった気になり、舞台裏に侵入するものがあるかもしれない」と述べた。だがそれはツーリストが舞台裏に何らかの神秘性を発見し興味を抱いている場合である。聞き取り調査からも分かるように偶然迷い込んだ裏側は単なる光景に過ぎず印象には残らない。観光地としての魅力が表舞台として完全性を所持していれば、舞台裏に出会わなくても大概満足に至るというのがツーリストの心情動向だといえる。

3. 歪曲した飛鳥の舞台創造

飛鳥という観光地は積極的な景観維持活動を実践することで自らの魅力を限りなく完全にちかいかい状態で保持してきた。しかし景観維持の具体的政策から見えてきたのは、ツーリストが頻繁に出入りする表側の観光周遊路と、滅多に訪問することのない観光地でない裏側の部分に明確な差異が存在することである。ここで焦点となるのは、観光周遊路を構成する箇所が本物の飛鳥以上に華やかな表舞台として演出されていることである。

明日香村では「明日香村にぎわいの街建築条例」が2001（平成13）年5月に定められ、建築基準法に基づき特別用途地区内の建築行為等の制限を緩和している。土地利用の法的規制に捉われるだけでなく地域振興から活力を生み出すために物販販売店、食堂・喫茶店、食品製造店、美術品・工芸品のアトリエ又は工房、博物館・資料館、ホテル・旅館、観光案内所・休憩所が営業できるようになった。

観光地としての環境を整えるとツーリストはいつでも快適に飛鳥観光を満喫できるようになり、景観維持活動についても先進的な試みに励むことで完全性は更に研磨されるといえる。ただ観光地整備を一心に行うことは得策ではなく、局面によっては飛鳥が持っている真正性を喪失してしまう。飛鳥に点在する遺跡や石造物は都の置かれた飛鳥時代頃から現在に至るまで微動だにせず生き続けている。飛鳥における真正性は史跡や農村景観に

囲まれたふるさとロマンの時代の息づかいを伝達することであり、ツーリストの深層心理を当時までタイムスリップさせることで本物らしさを表現しているといえる。

そこで、景観維持活動の現状と真正な飛鳥を追求した場合を比較してみる。建築物や工作物は町屋や寺内町に似た構成となっているが、そもそも明日香村は中世以降に発達した町屋の街並みや寺内町を中心に隆盛したわけではなく本質が異なる。古代から深遠なる歴史を積み重ねている土地であり、時代区分に相違が見られる。

電柱・電線については地中化することで地上から排除した。電柱・電線は当然ながら飛鳥時代にも存在していなかったことを考えると、この行為は真正性を意識して本来の姿を体現している。電柱・電線を除くことができるのであれば同じく近代以降の象徴ともいえる駐車場や自動販売機、ゴミ箱も排除することで真正性が得られるといえよう。しかしこちらについては残存している。道路についても色彩に配慮があるもののコンクリートの排除は困難で真正性を追求できているとは言い難い。

推薦されている移動手段に自転車があることも疑問を感じなければならない。飛鳥時代を体現するのであれば徒歩での散策が適切であり、自転車の普及は時代区分でいうだいたい後の話である。飛鳥の周遊をより短時間で快適に過ごしてもらうために導入した移動手段が、いかにも真正な飛鳥観光の代名詞かというように浸透している。

観光地としての飛鳥の現状は複雑で、全てが一体となって飛鳥時代に遡ることはできない。古代のみならず中世や近代といった様々な時代区分を象徴する要素が組み合わさり完成した、実に時代感覚の歪曲した舞台を創造しているのである。このような矛盾が生じるのは飛鳥が観光地だからである。ツーリストは真正性よりも快適さを要求することがある。真正性を追求することで滞在しにくい環境となればツーリストは疎遠となってしま

う。地域住民にも同様のことがいえ、昔に遡り過ぎると生活レベルが格段に低下してしまうという懸念を抱く。むしろ真正でなかったとしても細部まで「ふるさと」らしさが演出された、表舞台が過去をイメージできるという点で完全であれば充分である。目前の景観が快適性に秀でた現代版の飛鳥だったとしてもツーリストの「渾然とした認識」では矛盾を見出すことはできない。歪曲化した時代区分という文化的ないし歴史の見解の矛盾は大抵のツーリストにはどうでもよく、巧妙にふるさと演出がされていれば本物だと思込み洗脳されてしまうのである。

農の「ふるさと」演出と擬似イベントによる「古都飛鳥」演出

1. 明日香村の農業の現状と田園風景での「ふるさと」演出

史跡巡りといった歴史探索に主役の座を譲りながらも、飛鳥観光における田園風景は非常に大切な役割を担っている。

現代では農業の減退が唱えられ続けているが、明日香村についても農業離れや兼業化、就業者の高齢化に伴う担い手不足に悩まされている。これらの影響は耕作放棄地の増加につながる。運動して美しい田園風景も失うことになり、観光地としての飛鳥の魅力を削いでしまう可能性が高い。農業に危機が迫る中で、生きている農の空間を維持していく重要な役割を担っているのが、明日香村が積極的に取り組む農業体験やあすかオーナー制度である。

農業体験とは一時的なイベントとして催されており、参加者に農作業体験や試食をしてもらう行事をいう。オーナー制度とは耕作放棄地等の一部を貸し出し、土地の所有者とは別の人が支援を受けながら農作業を行う制度のことをいう。あすかオーナー制度についての研究は既に行われているが、その特徴は集落ごとに育てる農作物が異なる

ことである（宇山他 2002）。

あすかオーナー制度により地元農民の負担を軽減させながら耕作放棄地を蘇生させることができる。明日香村は以前からこの事業に取り組んでおり、現在に至るまで需要が高く人気である。しかし明日香村役場の職員によると、オーナー制度を支援する人々の高齢化により、制度発足当初から携わっていた農民は十数年の歳月を経て平均年齢が上がっているという。受け入れ体制の弱体化により事業を拡大するまでには至らないまでも、「ふるさと」景観に欠かせない田園を守っているのは間違いない。

もちろんこの事業で全ての耕作放棄地を蘇生させることはできないが、未使用の土地は県や役場が定期的に雑草除去を行うなどしている。けれどもこの作業も第 4 章で述べた景観維持活動と同様に、ツーリストが多く訪問する場所では実行されていない。観光周遊路がある平地の部分は手入れも簡単なため良好な整備状況にある。対して山間部になると勾配の急な土地が多く地元農民でさえ耕すのに苦勞をする。そんな場所でオーナーを募集することもできないので実際は無残な耕作放棄地の光景も存在するが、飛鳥の奥地に足を運ばないツーリストにはそのような問題が見えることもない。

平地部分についても稀に耕作放棄地を発見できるが、ここでは雑草が生い茂ることにより巧妙にカムフラージュされた格好となっている。入念に目視するならまだしも、田園風景を見慣れていない都会からのツーリストがその横を素通りする程度であれば、雑草の広がりや緑の豊かな自然と捉えてしまう可能性が高い。ツーリストの限られた行動範囲と「渾然とした認識」により表舞台である田園風景についても表層的な完全性が成立しているのである。

もうひとつ注目すべきは舞台裏である。裏側を覗くと農村景観保全における外来オーナーやイベント参加者、そして県や村役場関係者の介入があ

る。本来であれば農村景観は農民が普段通り仕事に従事することで維持されていく。しかし農業の衰退により農民のみで「ふるさと」らしい田園風景を維持できないために、通常は農業の役割を担うはずのない人々が加担しているのである。この社会的役割の変化が飛鳥の「ふるさと」景観における真正性に大きな影響を与えている。

ツーリストは、飛鳥を周遊している最中に目撃する表舞台である田園風景のすべてが農民により創出した風景であると思い込む一方で、実際は都住在住の人々がオーナー制度を利用して耕しているかもしれないという舞台裏があるのだ。まさか都会に住んでいる人が明日香村で農作業に励むとは考えないし、遠目で見える農民が地元住民か都住在住者かどうかはツーリストには判別すら困難であろう。また農業体験イベントは普通の農作業とは異なるため人員を大幅に増員して盛り上げる。週末に実施することの多いこのイベントの光景を、同じく週末に来る大勢の他のツーリストが見てしまうと、あたかも明日香村の農業が活気づいていると信じてしまうのである。しかし本物の農作業は機械導入による効率化で少人数作業が進行されているし、働く時間帯も人によって違うので地元の人と道端ですれ違うこと自体が少ない。活気というよりも平穏な雰囲気といえる。よってツーリストが感じる飛鳥の田園風景の盛り上がりは、真正性に欠ける演出されたイベントであり、都住在住者などが作り出した農の空間である。

このように飛鳥の「ふるさと」らしい表舞台としての田園風景は農民ではない異なった役割の人々が介入することにより成立している。真正性を保持しているとはいえ、農業体験目的のツーリストがイベントに参加することでいっそう華やかに演出された本物以上に魅力溢れる飛鳥の姿なのである。

2. 擬似イベントにより装飾される飛鳥

擬似イベントとはツーリストが観光地を知るた

めの間接的経験であり、観光地を本物以上に巧妙に仕立て上げる行為でもある。マッカネル (2001) は「リアルなものが空気と同じように無料で手に入るところで、わざわざ金を払って買う人工的の製品である。土地の人を『見物する』という行為自体が、旅行者を土地から隔離している」と擬似イベントの意義を考察している。

上記のような批判に反して観光地では現在も擬似イベントが重要な役割を占めている。飛鳥観光についても同様なことがいえ、擬似イベントに参加することが本物以上に「ふるさと」らしさや「古都飛鳥」のイメージをツーリストの心情に植え付ける。ただ単純に飛鳥を散策するよりも、断然に観光気分を堪能することができるのである。

飛鳥観光の一環として開催されているウォーキングイベントは、明日香村内をツアーガイドと歩きながら景観を楽しむものである。歩く途中で村内に点在している遺跡や石造物を巡っては飛鳥へ定住した渡来人の話や栄華を極めた蘇我氏の話など、その場所にまつわる歴史的逸話を話してくれる。この興味深いエピソードを聞くことによってツーリストは飛鳥の歴史を遡り当時の面影を想像し、より深く飛鳥を知った気持ちになる。飛鳥の歴史の重みを体感できたことを誇りに思うのである。ツアーガイドの語りというものは実に大きくツーリストの心情動向に関係する。

またイベントのひとつにバーチャル飛鳥京というものがある。これは明日香村役場や東京大学大学院情報学環などが主催したイベントで複合現実感技術を駆使して古代都市としての飛鳥を再現しようという試みである。対象地点の甘樫丘展望台・伝飛鳥板蓋宮跡・川原寺跡の景観は古都の礎を感じさせるものの、当時の建造物が残っているわけではない。あくまでツーリスト自身の想像の世界で蘇る世界であった。そこにバーチャル技術を搭載した機械を用いることで、失ったはずの景観が視覚的に復活したのである。

擬似イベントには他にも、夜間ライトアップ、

行燈を設置する光の回廊、蹴鞠、古代衣装といったように本物の飛鳥以上に幻想的な世界を創造しようとしている。擬似イベントの設定されていない通常の飛鳥観光では出会うことのない非日常的空間である。先述した農業体験による普段より盛り上がった「ふるさと」景観の姿も含めて、擬似イベントは観光客が満足するよう誇張された表舞台の飛鳥であり、その姿は真正なものであるとは言い難い。

ブルーナー (2002) は観光客の経験を「我々はインドネシア、ケニア、エジプトといった第三世界を訪れるが、そこで観察したところでは、観光客が意味のある会話をするのは他の観光客、ツアーガイド、旅行会社の現地人スタッフといった人々だけである」と述べている。飛鳥の擬似イベントも同様で、ウォーキングイベント中に少々の会話をするのは友人、他の観光客、ツアーガイドだけであり、会話自体をしないことも多い。地元住民と接触することはまずないといえる。その他の擬似イベントに参加しても観光客は観客としての立場やゲストとしての立場を払拭できないまま参加する感覚であるといえる。擬似イベントへの参加に満足する一方で、本人の気付かぬところで傍観者の立場となりどこか浮いた存在となっている。観光客が直面しているのは本当の飛鳥の姿ではなく、擬似イベントによって完全に作り上げられ、華やかに装飾された観光地としての飛鳥の姿なのである。

3. 観光地としての「飛鳥」と行政としての「明日香」

「ふるさと」を意識した景観維持活動や、擬似イベントにより華やかに装飾された飛鳥は観光地として完全に作り上げられ、巧妙に演出された世界である。そしてこの演出は飛鳥という舞台創造にも大きく影響している。明日香村役場ははじめ行政や地元住民はイメージ生成のために「飛鳥」と「明日香」を使い分けている。「明日香」という表

現は奈良県高市郡明日香村のように行政区域として現実的な場所を示しているのに対し、「飛鳥」という表現は観光地という曖昧な領域を示すときに用いられる。観光地としての「飛鳥」は歴史上で頻繁に見られる飛鳥時代のイメージも備わり、橿原市や桜井市や高取町の一部地域も含め「明日香」よりも広範囲を指す。観光地としての「飛鳥」が現実から逸脱した非日常的空間であることを強調するために、あえて使い分けていると考えられる。日常とは切り離された、観光空間としての他所イメージを形成することは観光客の獲得に有効である (神田 2001)。

そこで奈良県、明日香村役場、観光協会等が発行する観光パンフレットにおいて、どれだけ多く「飛鳥」という表現が使われているかを分析する。表2は全14冊の観光パンフレットの各々で、最も目立った記載がされるキャッチフレーズを抜粋し、そのフレーズでの「飛鳥」と「明日香」の使い分けを比較したものである。観光パンフレットは第2章で使用した観光ガイドブックと異なり、ホスト側の思惑が反映された情報であるため、意図的に使い分けているかが判断できる。内田 (1998 ; 2004) は、観光パンフレットは観光客を訪れさせようとする意図のもと、広告手段としての機能を持つと同時に、観光資源を手短かに紹介したカタログとしての機能も兼ね備えていると述べてい

表2 観光パンフレットにみる「飛鳥」と「明日香」の使い分け

観光パンフレットは飛鳥地区の情報のみ提供しているものを使用
 キャッチフレーズは一部修正しての掲載
 「飛鳥」ということばの使い方
 ... 「飛鳥」 ... 「飛ぶ鳥の明日香」
 ... 「明日香」 × ... 記載なし

	キャッチフレーズ	「飛鳥」ということばの使い方
パンフ①	心とからだであふれる素顔の「飛鳥」歴史が語る古代ロマンの旅路へ	◎
パンフ②	ミステリーロマン飛鳥王国	◎
パンフ③	飛鳥の美 ここに再現	◎
パンフ④	萬葉旅行-飛鳥-	◎
パンフ⑤	万葉の故地 心のふる里 古京飛鳥路とその周辺	◎
パンフ⑥	歴史のふるさと飛鳥には、あなたのふるさとがあります	◎
パンフ⑦	飛鳥は神様の郷	◎
パンフ⑧	ときに鮮やかに、また幻想的に、秋の飛鳥は古代ロマンが美しく色づきます	◎
パンフ⑨	いにしえからの、春風がやさしく吹く頃、飛鳥の里は、笑顔が爛漫	◎
パンフ⑩	飛ぶ鳥の明日香	○
パンフ⑪	とぶよりの明日香の里	○
パンフ⑫	明日香の歴史的景観を支え続ける「農」にエールを	△
パンフ⑬	古代ロマンが息づく里	×
パンフ⑭	段々畑と葦の里に	×

る。

ここでも「古代ロマン」や「ふるさと」といった語句が並んでおり、いかに重要な観光資源であるかが理解できる。そしてそれらの語句と一緒に用いられるのが「飛鳥」である。パンフ からパンフ までは「飛鳥」と表現しており、直接的に表現するキャッチフレーズだけで全体の約6割を占める。さらに注目したいのは表2で「明日香」を使用しているキャッチフレーズである。全3冊のうち、パンフ とパンフ の2件は「飛ぶ鳥の明日香」と表現している。この表現は「明日香」の枕詞として「飛鳥」が用いられた万葉集を連想させるものであり、単に「飛鳥」という以上に過去へ誘う幻想的な雰囲気を漂わせる。「明日香」とだけ表現するのは意味合いが異なる。今回は筆者が入手できた観光パンフレットの範囲内で分析したため、信憑性に多少疑問の余地があるが、「飛鳥」と「明日香」の使い分けの傾向は概ね把握できたのではないかと推測する。

「飛鳥」という非日常的な過去空間のなかで遺跡や石造物から「古代ロマン」を感じ、家屋や田園といった「ふるさと」景観を眺め、擬似イベントにより「飛鳥時代」当時の生活空間を想像する。過去イメージの連鎖である。そしてこの「飛鳥」こそが華やかな観光地としての表舞台である。現実的な生活空間を連想させる行政としての「明日香」は舞台裏であり、ツーリストの視線が集中する観光の舞台では鳴りを潜める。「飛鳥」と「明日香」はゴッフマンの劇場理論という観光としての表舞台と行政としての舞台裏の二面性を如実に見出す表現方法だといえる。

結論：これからの飛鳥観光

冒頭で触れたように滝波（2005）のいう原風景が「ふるさと」を回想させ、現代人ツーリストが追い続けてやまない理想の観光地だとしたら、こんな場所は日本中の至る所に存在する。真正なる

「ふるさと」は、例えば最寄駅から当該地点までバスで数時間かかり、一面中に広がる水田と家屋はポツンポツンと建っている程度、電灯は少なく月の光に頼るといったような、いわゆる観光地化していない「ふるさと」である。ツーリストが憧れを抱くことがない不便な場所なのである。

しかし明日香村はそうではない。観光ガイドブックなど色々な手法から「ふるさと」を印象付けていても、真正な「ふるさと」を目指しているのではなく「ふるさと」らしさを体感できる観光地として異常なまでに快適な空間を創り出そうとしている。限りなく本物のように模した世界は「飛鳥」という実に非日常的な観光空間として巧妙に演出されているのである。

本稿の目的であった明日香村の観光機能上発生する完全性や真正性の矛盾はたしかに存在していた。景観維持活動により歴史的な雰囲気を漂わすように、デザインを統一したり現代を象徴する物体を目立たないように隠蔽する行為は、時代区分の歪んだ現代版の飛鳥の空間を生み出した。田園風景についても農業維持に一役買っているのが農民だけではなく県や役場関係者や都会在住者という社会的役割に矛盾がある。擬似イベントも内容自体が明日香村の日常生活では起こり得ないくらい華々しく装飾された飛鳥が表現されている。これらの演出により飛鳥の真正な姿は見えづらくなるかわりに、ツーリストを大いに満足させることができるのである。

また、明日香村全域の景観において完全性が成立していない点についても深刻に考える必要はない。ツーリストが記憶している景観の大部分は観光周遊路沿いであり、なおかつ「渾然とした認識」で全体像として景観を認識する行為が大半であるために、細部まで注視することもない。周遊路から外れた枝道や山間部に至っては整備が疎かになっていてもたいした問題ではなく、ツーリストは興味すら抱かない。飛鳥の完全な姿はゴッフマン理論という表舞台に成立していれば舞台裏の未整備

に関係なくツーリストを大いに満足させることができるといえる。ツーリストの表舞台と舞台裏に対する興味の示し方に差があるという心情動向をうまく利用した演出なのである。

飛鳥では完全性も真正性も完璧なものではないが、ツーリストが満足する程度の歴史的風土や雰囲気を楽しむことができるし、遺跡や石造物を見て過去に思いを馳せることも可能である。幾重に広がる田園風景を見て「ふるさと」を回想することもできる。飛鳥観光は様々な経験を一挙に得ることのできる「手ごろなふるさと」としての魅力を発揮しているのである。更にいえば売店や観光案内所も多く立地している。第 4 章で触れた「明日香村にぎわいの街建築条例」を施行して建築制限を緩和していることからツーリストの快適性は今後いっそう向上すると考えられる。

一方で明日香村、橿原市、桜井市の一部区域が「飛鳥・藤原 - 古代日本の宮都と遺跡群」として世界遺産の暫定リストに掲載されるに至った。

世界遺産というブランドを獲得することになれば飛鳥が観光地として飛躍的に魅力を増すことは間違いない。ツーリストは世界遺産ということばに過剰なほど目を輝かせるからである。しかしながら観光地としての認知度が上がり快適性が向上するに反比例して普遍的な魅力は喪失してしまう。飛鳥の「ふるさと」らしさが薄らぎ、真正性や完全性が見えないただの華々しい観光地になってしまうかもしれない。それだけ観光行為と完全性・真正性の共生は難しいのである。

景観保全の先進的モデルである明日香村が今後観光地としても上記の問題を解消し、完全性・真正性を保持した理想的な発展を遂げることは大いに想定されることである。他地域の模範となり得る明日香村の動向はこれから先もずっと注目され続けているべきだと考えている。

[付記]

本稿を作成するにあたり、明日香村役場の小野

智貴氏はじめ地域づくり課の方々、飛鳥京観光協会の皆様には貴重なお話と多くの資料を提供いただきました。心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 荒山正彦 1995：文化のオーセンティシティと国立公園の成立 観光現象を対象とした人文地理学研究の課題 . 地理学評論68A - 12 : 792 - 810
- 伊藤 悟 1994：北陸地方における都市のイメージとその地域的背景. 人文地理46 - 4 : 1 - 19
- 伊藤政志 2007：完全性へと解消されないものとしての美 カント美学における合目的概念の射程 . 美學 57 - 4 : 1 - 14
- 内田順文 1993：比喩的認識と場所イメージ. 国土館大学文学部人文学会紀要 : 51 - 68
- 内田順文 1998：中部地方における都市のイメージについて 観光パンフレットを用いた場所イメージの定量的分析の試み . 国土館大学文学部人文学会紀要 : 69 - 82
- 内田順文 2004：中国・四国・九州地方における都市の観光イメージについて 観光パンフレットを用いた場所イメージの定量的分析の試み . 国土館大学地理学報告 : 1 - 16
- 宇山 満・浦出俊和 2002：奈良明日香村におけるグリーン・ツーリズムの効果と問題. 近畿大学農学部紀要 : 31 - 41
- 遠藤英樹 1996：社会的リアリティとしての「理解」と「誤解」 いかにして人はコミュニケーションにおいて「理解/誤解」するのか . 奈良県立商科大学「研究季報」7 - 1 : 21 - 31
- 遠藤英樹 1996：「観光地に対する印象」の形成と効果 奈良の調査から . 奈良県立商科大学「研究季報」7 - 3 : 11 - 21
- 神田孝治 2001：南紀白浜温泉の形成過程と他所イメージの関係性 近代期における観光空間の生産についての省察 . 人文地理53 - 5 : 24 - 45
- ゴッフマン, E. 著, 石黒 毅訳 1974：『行為と演技 日常生活における自己呈示』誠信書房. Goffman, E.

1959. *The presentation of self in everyday life.*

- 須山 聡 2003：富山県井波町瑞泉寺門前町における景観の再構成 観光の舞台・工業の舞台 . 地理学評論76 - 13 : 957 - 978
- 関戸明子 2007：「文化的景観」の形成と保全・活用をめぐる課題 北海道美瑛町を事例に . 歴史地理学49 - 1 : 24 - 37
- 滝波章弘 1998：ツーリスト経験と対照性の構築 『旅』の読者旅行文をもとに . 人文地理50 - 4 : 24 - 46
- 滝波章弘 2003：ジュネーブの代表的ホテルにおける雰囲気の意味. 地理学評論76 - 9 : 621 - 644
- 滝波章弘 2005：『遠い風景 ツーリズムの視線』京都大学学術出版会.
- 福田珠己 1996：赤瓦は何を語るか 沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動 . 地理学評論69A - 9 : 727-743
- 藤本高志 1998：歴史景観維持のための農地保全政策の便益と費用の評価 明日香村におけるケーススタディー . 農村計画学会誌17 - 1 : 40 - 50
- ブルーナー, E. M. 著, 遠藤英樹訳 2002：ツーリズム・創造性・オーセンティシティ. 奈良県立大学「研究季報」13 - 3 : 13 - 18。Bruner, E.M. 1989, *Tourism, Creativity, and Authenticity*
- マッカネル, D. 著, 遠藤英樹訳 2001：演出されたオーセンティシティ 観光状況における社会空間の編成 . 奈良県立商科大学「研究季報」11 - 3 : 93 - 107。
MacCannell, D. 1973, *Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings.*
- 山村順次 1995：『新観光地理学』大明堂.